

【書評】

河合秀和著「クレメント・アトリー」中公選書、2020年7月刊

正会員 茂木 愛一郎



河合秀和氏がこんな本を書かれました。河合さんは比較政治学専攻で、長らく学習院大学で講じられていました。またチャーチル伝（中公新書、初版は1979年）を書かれた方として有名です。英国は第2次世界大戦における欧州戦線勝利（1945年5月）が確定するや総選挙（7月）に入ります。労働党は、多くの予想を覆してチャーチルの保守党を破り、アトリーが首相になります。労働党は1951年10月の総選挙でチャーチルに敗れるまで続き、アトリーは首相としていわゆる「揺りかごから墓場まで」の英国型福祉国家建設を押し進めます（直接の担当大臣はアナイルン・ベヴァン）。河合さんはチャーチル伝においてアトリーの存在意義を知りながらも相対的に低めた位置づけをしたことがずっと気になっていらしたらしいのです。河合さんもう87歳、書き残しておきたいという強いご意思を感じます。そのように英国的福祉国家の確立はアトリー政権で行われました。ベヴァリッジ構想の具体化も同政権下で実現しました。日本の健康保険制度のある意味でのお手本はNHS（国民保健サービス：こちらは基本的に租税を基礎にした公営）です。そういうことを実行したアトリーを回顧するという理由。もうひとつは、昨年12月の英国の総選挙は、Brexitの仕切り直しや新しいsocial democratな政権（河合さんによれば「第2のアトリー政権」となるべきもの）ができたかも知れないという期待があったというのです。結果は、保守党のコービン労働党を貶めるメディア操作や国内での格差拡大といった軋轢の敵対物となったのがEUという存在でその離脱こそ大義であり曖昧な態度をとった労働党から保守党に票が流れてしまったことで潰えてしまったわけです。仮に労働党政権ができていたら、その文脈で現代の英国政治やアトリー論に紙面を割いたものが書くということでした。それができないなかで、ご縁のあるの中央公論からこのアトリー伝を出すことができた「あとがき」に書かれています。

結構感動するのは、1951年10月の総選挙直前の党大会での最終演説でアトリーはWilliam BlakeのMiltonの詩を引用したとの記述でした。詩はAnd did those feet in ancient time（古には歩みを進めたというが）で始まり、最後 I will not cease from mental fight, nor shall my sword sleep in my head till we have built Jerusalem in England's green and pleasant Land.（精神の闘いから一歩も引く気はないし、この剣を手のなかで眠らせてもおくこともない。緑なし心地よいイングランドの地に「エルサレム」を打ち建てるまでは）。あのParry作曲のJerusalemのメロディーが思い浮かびます。Jerusalemは未完のイングランドを象徴しています。愛国者でもあるアトリーの社会変革の真骨頂が表されていると思います。

どうか皆さん、手にとって本書を読まれることをお勧めいたします。